

平成 8 年 8 月 20 日

大学

先生

小樽商科大学自己評価委員会

委員長・教授 中川 勇治

## 教官の転出理由の調査（依頼）

残暑の候、先生におかれてはますます御清祥のことと拝察いたします。

さて、当委員会では小樽商科大学における研究・教育活動のさらなる充実・発展を目指して、学内の諸事情を点検、分析、評価する作業に従事しております。その作業の過程で浮かびあがってきた重要な問題の一つに、本学教官の著しい流動性があります。すなわち、本学ではほとんど毎年のように、少なからぬ教官が他大学あるいはその他の機関へ転出し、そのため教授スタッフに恒常的な欠員が生じております。

もちろん言うまでもなく、異動・転出は教官個人の正当なる権利であり、自由であって、当委員会としてもその権利の行使を批判あるいは非難して、いわばショーヴィニスティクな論議を展開する意図はいささかもありません。ただ、上述の目的を達成するため、当委員会は幾分なりとも教授スタッフの定着性を高めるべく、そのために必要な客観的条件を正確に把握し、今後の具体的な方策を探りたいと望んでおります。

さて、先生は曾て本学に勤務され、後に転出された御経験をおもちですので、この流動性の問題については御理解いただけるものと存じます。そこで失礼をも顧みず、この件に関し、御自身の体験に基づいた忌憚のない率直な御意見を承って、本学改革の一助といたしたく、敢えて下記のアンケートを作成した次第です。御回答は公表いたしません。当委員会において数量的な集計、分析を行い、転出された方々全体に共通する傾向を探る重要な資料として用い、いずれ要約を委員会報告書『北に一星あり』第三集に発表する所存でございます。

御多用中まことに恐縮ではありますが、9月末日までに御回答下さいますなら幸甚でございます。

## 記

本学よりの転出にあたり、御決断の根拠となった事項に○印をおつけ下さい（複数回答も可です）。なお各項目に関してコメントがございましたら是非お書き下さい。

### I. 転出の契機

- 1) 自分の出身校より招聘された。
- 2) 自分の出身校の指導教官から推薦された。
- 3) 自分の出身地の大学より招聘された。
- 4) 本学において相当長期にわたり、研究・教育に従事し、一定の成果を挙げたので、本学に不満はなかったが、新たな学問的刺激を求めている。
- 5) 本学よりも自分の専攻分野の研究にとって有利な条件をもつ大学より招聘された。
- 6) その他 \_\_\_\_\_

### II. 研究生活

#### 1. 研究環境について

- 1) 研究室の整備がよくなかった。
  - a) 研究室の備品のうち、机、椅子、ソファーが長期にわたる使用のためか、かなり汚損しており、書棚が足りなかった。
  - b) タイプライター、パソコン、ワープロ、ファクス等の設備が不足で、それらが必要な場合には研究費から支出しなければならなかった。
  - c) 冬期間、勤務時間外の研究室使用にあたり、研究室単位の暖房器具が不十分であった。

---

---

2) 自然科学関係の実験室は、実験設備、実験器具が貧弱で、納得のいく研究ができなかった。

---

---

3) 図書館では、自分の専攻分野に関する文献（専門書、専門雑誌等）があまり体系的に収集されておらず、不十分だった。

---

---

4) 共同研究・討議のための場が不足していた。

---

---

## 2. 研究条件について

1) 本学が国立大学であり、規模も全国最小に近いので、研究費は決して潤沢とはいえず、研究資料の収集にあたり、制約がきわめて大であった。

---

---

2) 研究成果を発表する機会、手段に乏しく、札幌を含む本学周辺地域では成果刊行の可能性がきわめて小さかった。

a) 本学の紀要『商学討究』および『人文研究』は、いわば同人雑誌に類似した発表機関で、掲載論文の審査が行われず、あまり論文発表の意欲を刺激しなかった。

b) 本学周辺地域の研究会、学会は活動が不活発であった。

---

---

3) 学会参加は経済的に困難だった。

a) 年間旅費では国内の学会に一度参加できるだけで他の学会、研修、資料収集には私費の支出が必要だった。

b) 在外研究のチャンスが乏しく、それも年功序列的配分であった。

c) 本学周辺の地域には自分と同じ専門の研究者が少なく、恒常的に交流し、学問的刺激を得ることが少なかった。

---

---

4) 研究のための時間が不足

a) 学内の諸委員会での任務が多く、研究の障害となった。

b) 授業負担（夜間主コース・かつての短大部も含め）が重く自由な研究時間が少なかった。

c) サバティカル・リーヴ（研究専念の休暇）がとれなかった。

---

---

## Ⅲ 日常生活、生活環境について（以下、当地とは本学の所在地を指す）

1) 宿舎は老朽化し、あまり清潔でなく、狭少であった。

---

---

2) 子女の教育環境として当地はあまりよくなかった。

a) たとえば普通高校が少ない(公立は僅か2校)

b) 大学入試の観点よりすれば当地の高校のレベルは必ずしも高くなかった。

---

---

3) 家族が当地になじめず、この地の生活に不満であり、早く出身地へ帰りたがった。

---

---

4) 当地には劇場、音楽堂、博物館、美術館等の文化的施設や病院その他の保健施設が少なかったし、あるとしてもその水準は高くはなかった。

---

---

5) 演劇、音楽会、美術展、講演会などの文化的な催しが少なく、精神的な満足感が乏しかった。

---

---

6) 当地の気候と地理的条件(半年近い積雪・寒冷期間)になじめなかった。

---

---

7) その他、当地は要するに「地方都市」であって、生活上の刺激が乏しかった。

---

---

IV 先生が転出を決意されたもっとも大きな理由は何でしたか。プライバシーに関わりのない範囲でお教え下さい。